



4月の東京ニューシティ管定期も好評。12月には再び同管定期に登場、ブラームス、シューマンを指揮する

オーケストラ
東京ニューシティ管弦楽団 (第44回)

指揮は音楽監督の内藤彰。まずはスメタナの交響詩《わが祖国》から「ホルダウ」。あくまで正攻法でのアプローチで、オーソドックスで確実な骨格を構築していく。アーティキュレーションに問題の多かったブライト Copp 版ではなく、チェコのオリジナルスコップ版ではなく、チェコのオリジナルスコップ版を用いたというのが眼目で、冒頭のヴァイオリンによる第1主題や後半のコントラバス、トロンボーン、テューバなどの扱いなどに、スプリフォン新版の修正を取り入れつつ独自の考察も加えての演奏となり、確かにごく自然な流れで説得力を増したように思う。

続いて江澤聖子をソリストに迎えてのシヨパン「ピアノ協奏曲第一番」は、いささが展開が重く、またパッセージによってはオーケストラとうまくすり合わないところも散見されたが、情感の発露や華やかな情熱をストリートに表わし、また旋律線の歌い直しなどには優美なニュアンスがあつて、しつとりした味わいを残した。

そしてドヴォルザーク「交響曲第8番」においてはブライト Copp 新版を使用、第1楽章冒頭チェエロの主眼のダイナミクスなどに改訂を加えるなどして斬新な響きを標榜したが、全体の造形がもう少しドラマティックでもよかつた。3月10日・東京芸術劇場

●真嶋雄大

第44回定期演奏会批評 (「音楽の友」2006年5月号より)

旬刊 音楽舞踊新聞 (第三種郵便物認可)

2006年 (平成18年) 9月21日号

ブルックナー交響曲第9番の完成版

東京ニューシティ管弦楽団、新稿シリーズで

東京ニューシティ管弦楽団ではブルックナーの新稿による世界初演などで注目され、高い評価を得ているが、その新稿シリーズの第3弾は、完成を見ずに絶筆した交響曲第9番の「完成版」。

同曲は承知の通り3楽章までしか完成されていない。完成に力を注いだブルックナーだったが、膨大な量の書きかけのスコアを遺し、未完成のままとなった。

この量は補筆完成に足りるものであり、また演奏可能な楽譜も何種類か書かれてあつた。

今回は、アメリカ在住の物理学者でブルックナー学者のキャラガンが最初に世に出し、あまり聴く機会のないこの最新版を使用して演奏する。

9月28日(木)7時・東京芸術劇場 指揮：内藤彰、ワグナー：「トリスタ」と「イゾルデ」より「前奏曲と愛の死」ソプラノ：蔵野蘭子/国際ワグナー歌唱コン・ヨーロッパ大会特別賞、新国立劇場のワグナーで称賛を受けている、ブルックナー：交響曲第9番(4楽章完成版/1〜3楽章：コールス版)。S6千円、B3千円、学生千5百円。

問035933・3222